

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 天野 貴文

論 文 題 目

Preoperative prognosis score is a useful tool
regarding eccentric rotational acetabular osteotomy
in patients with acetabular dysplasia


(寛骨臼形成不全患者において偏心性寛骨臼回転
骨切り術に対する術前予後予測スコアは有用な
ツールである)

論文審査担当者

主 査


委員

名古屋大学教授

濱嶋 信之 

委員

名古屋大学教授

伴 信太郎 


委員

名古屋大学教授

亀井 護 

指導教員

名古屋大学准教授

西田 佳弘 

論文審査の結果の要旨

寛骨臼骨切り術の術後成績に対する様々な術前・術後のリスク因子の報告があるが複数の因子がどの程度関与しているかはわかっていない。本研究では術前で確認できる因子のみから術後成績に影響する因子を抽出し、術後予後を予測するスコアを開発した。700例のERAOの症例群を患者背景・患者所見・画像所見などを後ろ向きに調査しHarris Hip Scoreが80点未満となるまでの時間をendpointとした単変量・多変量Cox回帰を行い、5つの予後予測因子（関節適合性、発育性股関節形成不全の既往、Body Mass Index、最小関節裂隙、外転可動域）を抽出した。各因子をカテゴリー化、重み付けをして0-17点のスコアを作成し、点数に応じた術後予後予測を可能とした。このスコアが寛骨臼形成不全を有する患者に対して手術の適応の是非を判断する際に有用なツールとなりうる可能性が示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 今回抽出された発育性股関節形成不全に関しては近年減少傾向であり、また人種間での発生頻度に差が存在する。しかし700例の対象群からの抽出された因子であり、該当者は減少したとしてもリスク因子としての位置付けは変わらないと判断した。
2. 手術前の関節変化の評価として術前病期・最小関節裂隙について検討している。それぞれ単変量解析の段階では有意であったが多変量解析の段階で術前病期は抽出されなかった。交絡因子を考慮した上で因子を抽出する段階で関節裂隙や他の因子が術前病期より優位であったことが考えられる。また検者間の誤差の観点でも術前病期より関節裂隙の方が優れていた。したがって術前病期よりも最小関節裂隙の方が汎用性は高い因子である可能性が考えられた。
3. 予後予測因子の抽出方法に関しては単変量・多変量Cox回帰を採用した。最小関節裂隙に関して過去の文献、BMIは国際基準、外転可動域は臨床スコアとして使用されている標準値を参考とした。

本研究は、寛骨臼形成不全に対する手術適応を考慮する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	天野 貴文
試験担当者	主査	濱島 信之	濱島 信之	濱島 信之
	指導教員	西田 佳子	西田 佳子	西田 佳子
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時代の変化による対象群の変化の影響について 2. 手術前の様々な関節変化の中での本研究の抽出項目の優位性について 3. 各抽出項目の抽出方法とカテゴリー化における評価と妥当性について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、整形外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				